

ケアの人間学

——合同研究会要旨集——

No.6



2009年3月

目次

まえがき	浜渦 辰二 (2)
ヒューマニズムという名の情操教育を超えて ——いま求められている薬剤師倫理教育とは?	松田 純 (4)
薬剤師のモラルディレンマ ——ケース検討法から学ぶ倫理的問題の対応法—— ...	川村 和美 (6)
がんの痛みを薬でコントロール ——チームで取り組む緩和医療——	塩川 満 (8)
安楽死問題を巡るスイスの議論状況	神馬 幸一 (16)
英国のホスピスケアについて ——セントヘレナ・ホスピスと在宅ケア——	今福 恵子 (18)
この5年間でふりかえって ——当事者鈴木純子(仮名)さんの統合失調症発症から現在までの語り——	鈴木純子/山田創・上久保真理子 (20)
こころをつなぐ音楽療法 ——緩和ケア病棟における音楽療法の取り組みから——	勝山真ゆみ (22)
患者の安全と医療の質向上を目指して	増田伊佐世 (24)
知的重度重複障害者の息子との育ち愛 ——ひとりまたひとりのご縁を繋いで——	浅倉さち子 (26)
見学報告 「社会福祉法人 浦河べてるの家」	(28)
研究会の記録	(32)
研究会規約	(34)

まえがき

浜渦 辰二

本誌『ケアの人間学—合同研究会要旨集—』の No.6 をお届けできることをこれまで以上に嬉しく思っています。と言いますのも、冒頭から私事になって失礼しますが、前号の「まえがき」末尾に書きましたように、昨年4月から大阪大学に着任となり、静岡と大阪を毎週行き来する一年間だったからです。そのなかでも研究会を継続し、本誌を発行できたことに、ひとしおの感慨があります。皆さまのご協力のおかげです。

この一年間の研究会も、これまで同様、ケアのさまざまな現場で、さまざまな分野で、さまざまな角度から取り組んで、日々いろいろと問題を抱えながら考えておられる方々のお話を伺うことができ、お互いに異なる立場からの意見を交換しあえる場となりました。いくつかピックアップしてご紹介しますと、私も関わってきた文科省科学研究費による共同研究「薬の倫理学と薬剤師の倫理教育」（代表：松田純）が最終年度を迎え、中心的役割を果たしているお二人にお話ししていただくとともに、聖路加国際病院薬剤部チーフの塩川満先生（日本緩和医療薬学会評議員）をお迎えして講演会を開くこともできました。そのほか、「難病・慢性疾患患者の在宅ケア」「スイスの安楽死問題」「英国のホスピスケア」「統合失調症から回復された方の当事者研究」「緩和ケア病棟における音楽療法」「病院医療安全管理室の活動」「自閉的傾向のある重度重複障害者の母の物語」と、本当にさまざまな角度からケアの問題を考える機会を提供いただけたこと、感謝しております。

前号「まえがき」で、『臨牀看護』（Vol. 33, No. 13, 2007年11月、へるす出版）に日本各地で行われている「死生観を育てる」ための研究会の一つとして、私たちの研究会を紹介する機会をえたことを紹介しました。他に紹介された三つのうちの 하나가、「死生学の展開と組織化：東京大学大学院人文社会科学系研究科グローバルCOEプログラム」でしたが、これがいまは、「東京大学死生学研究連携ユニット」（代表：島菌進）として動き出しているようです。また、それとは別に、「立命館大学生存学研究センター」（代表：立岩真也）も立ち上げられています。他方また、科学研究費共同研究「『いのち・からだ・こころ』をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み」（代表：榊原哲也）による企画として、ソウル大学ナミン・リー教授（韓国現象学会会長）を招いて「現象学と質的研究方法」という講演（東京大学、2月19日）を、ドイツ・ヴッパータール大学教授ラズロ・テンゲイ教授を招いて「再発見された経験」（八王子セミナーハウス、3月14日）という講演をしていただきました。私たちの地域でケアの文化を築いていくことを目指す活動も、静岡大学の臨床人間科学専攻や大阪大学の臨床哲学講座のほか、こうしたあちこちの大学での共同研究の動きとも連動・共鳴していけると、「グローバルに考え、ローカルに活動する」ことができるかのではないかと考えています。

前号でも、静岡大学大学院の院生たちを連れていくつかのクリニックや施設を訪問・インタビューさせていただいたことを報告し、また、北海道浦河町にある精神障害等をかかえた当事者の地域活動拠点「浦河べてるの家」を訪問したことにも触れましたが、その見学報告（院生執筆）が前号には間に合いませんでしたので、遅くなりましたが、今号に掲載させていただきました。

前号でも、この研究会から生まれた繋がりの中かで、私自身もいろいろな発表、講義、講演をする機会を与えられたことを紹介しましたが、この一年間にも、次のように多くの機会を与えられました。「終末期と高齢者のケア～ケアの現象学的人間学から臨床哲学へ～」（第3回医療人文学研究会、2008.4.23、大阪大学）、「ケアの人間学～在宅ケアのゆくえ～」（静岡県地域包括・在宅介護支援センター協議会 2008.4.26、静岡市産学交流センター）、「ケアしケアされる存在としての人間」（東葛・生と死を考える会・月例学習会、2008.7.19、麗澤大学）、「緩和ケアと尊厳」（がんコンソーシアム in 徳島、2008.10.4、徳島県立中央病院）、「ビジネス・倫理・ケア」（西日本哲学会シンポジウム「応用倫理学の現在」、2008.12.7、琉球大学）、「ケアすることーケアされること」（天竜厚生会看護職員向け研修会、2008.12.9、天竜厚生会研修センター）、「リビング・ウィルを考え直す」（患者のウェルリビングを考える会、2009.1.17、神戸市・あすてっぷ K O B E）、「ケアするということ」（卒業記念講演、2009.3.4、静岡県中部看護専門学校）。こちらから話をさせていただくことは、単に学びの場を提供するだけでなく、こちらから学ぶ場でもあり、多くのことを学ばせて頂きました。

また、これらとも関連して、『楽園 (RAKUEN)』（MOA 商事出版部、2008 年秋、Vol. 33）の「特集：生きる力を高めるケア」には、「より良く生きるために～ケアしケアされる関係を通じて永遠に続く「いのちの連鎖」を感じ合う～」と題するインタビュー記事が掲載され、木村敏・坂部恵（監修）『〈かたり〉と〈作り〉 臨床哲学の諸相』（河合文化教育研究所、2009 年 1 月）には、「ナラティブとパースペクティブー「〈かたり〉の虚と実」をめぐってー」という論文を、また、『緩和ケア』（青海社、2009 年 1 月号）には、「スピリチュアルケアと臨床哲学」という小文を掲載いただきました。

さて、また私のこの一年間の活動の紹介で長くなってしまいました。先にも書きましたように、私は、昨年 4 月 1 日より、大阪で勤め週末には帰ってくるという生活のため、土曜日に開催しているこの研究会の活動には、何らさしつかえはなく、継続してきております。しかし、来年度は静岡での非常勤の仕事もなくなり、重心がますます大阪の方に移っていき、大阪でのさまざまな研究会での活動も増えてきています。したがって、この会を継続していくためにも、これまでのように私 1 人が何もかもするという体制ではなく、私の後任として静岡大学に着任された堂園俊彦さんを中心に、数人の方がサポートしていただける体制にしていかなければならないと思っています。皆さまのご協力を仰ぎたいと思います。

さて、すでに何度も御案内しましたように、本研究会では会員・会費制が導入され、本誌も会費を納めて会員になっていただいた方にのみお送りするような制度にしています。今後とも、会員になっていなくても、研究会に参加していただいて構いませんし、メールアドレスを登録されておられる方にはメールの案内をいたしますが、本誌をお送りすることと、メールアドレスを持たない方に葉書で研究会の案内をすることは、会員になられた方のみに制限させていただきますので、ご承知おきください。年会費は一般会員 2,000 円、賛助会員 5,000 円です（郵便振替口座：00880-1-186850 「ケアの人間学」合同研究会）。

皆さまのご協力があってこそ成り立つ研究会と要旨集です。今後とも、ご支援のほど、よろしく、お願いいたします。

（「ケアの人間学」合同研究会幹事）